

桐壺の構造

村 井 利 彦

(一)

桐壺巻を読み始めると、のっけから常規を逸した恋の事実が提示され、

唐土にも、かかる事の起りしこそ、世も乱れ、あしかりけれど、やうやう天の下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに⁽¹⁾云々

と、読者はたちまち白居易の『長恨歌』の恋と天下大乱のイメージを要求される。そのイメージを思い描いた読者の前を『源氏物語』は巧妙に流れてゆく。

続いて光源氏、つまりその愛の申し子の誕生という事実を語り、源氏物語は『長恨歌』から一旦離れる。楊貴妃は子など産んでいない。次に、子が産れたことによる帝の愛の変質を語り「一の御子の女御」の疑念、他の「女御、更

衣」の露骨ないやがらせを語り、再び『長恨歌』に接近する。傾城が天下大乱をもたらす。後宮の乱はその予兆かも知れない、と読者はここで思うにちがいない。

御局は桐壺なり

いやがらせの前におかれた、この短文の効果は拔群である。更衣が「あまたの御かたがたを過ぎ」て行かねばならぬという設定の妙は、言わずもがな、この「桐」のイメージは、読者の中の『長恨歌』と触れ合って、不吉な響きをかもすはずである。

秋雨梧桐葉落時⁽²⁾

事は予想通り運んで、桐壺の更衣は光源氏三歳の時死ぬ。彼女は「事にふれて、数知らず苦しきことのみまさ」り「いたう思ひわび」て死んでわけである。だから楊貴妃とは余程違う。楊貴妃の場合は、動かなくなつた兵士を動かすために玄宗皇帝が泣いて馬諷を斬つたのに等しい。作者は、桐壺帝と更衣の哀切な別れを活写し、葬送の場で、三位の位を追贈するという場面を設け、偏愛されたけれども身分は低かつたのだという事実を強調して見せる。更衣を楊貴妃から相当引き離そうとしているように見える。楊貴妃は、愛を専らにするや一族郎等を引き上げ彼等に権力を握らせるや国政を壟断した。一族郎等の失政の結果が彼女の死であつたわけである。一方の更衣は、父すでに亡く、「はかばしき後見」も無い。ただ帝の愛に生きるより術のないかわいそうな女にすぎない。彼我の差は計り知れぬ程大きい。

しかし、元はといえば、帝の愛の異常さから来した結果なのだから、楊貴妃の死も更衣の死も選ぶところはない、ともいえよう。楊貴妃を殺さねば動かぬと主張した兵士の姿を女御・更衣に置きかえて優しく描いたととれなくもな

いからである。

さて、最愛の人を失った後の設定は、彼我の差などと暢気なことを言っていられなくなる。桐壺卷野分の段は、完全な『長恨歌』の蓬萊宮の段の換骨奪胎である。

馭負の命婦が、臨邛の道士のように、蓬萊宮に比すべき「蓬生」の宿を訪れる。そして、道士が持ち帰った「鈿合金釵」の片身のごとき、更衣生前の「御装束一領、御髪上の調度めく物」といった形見の品を命婦が持ち帰る。

命婦が復命した時、帝は、「長恨歌」の絵を見ている。伊勢の歌が添えられた絵であるというのだから、『長恨歌』の後半。最愛の人を失った帝の愁嘆場、そして蓬萊宮の場であることが確認できよう。いま念のため『伊勢集』のその場面を引用しておこう。

長恨歌の御屏風亭子院のかかせ給て所々よませ給ける帝の御手にて

紅葉はに色見えわかてちイふる物はおもふ秋の泪成けり

かくはかりおつる泪のつゝまれて雲の便りにみせまし物を

かへりきて君おもほゆる蓮はに泪の玉とおきゐてそみる

玉すだれ明るもしらてねし物を夢にも見しと思ひかけきや

くれなるにはらはぬ庭は成に鼻悲しきことの葉のみちりつゝ

これはきさきさきかはりて

導へする雲の舟たになかりせは世をうみなかに誰かとはまし
るる雲の人はきえせぬ物ならはみをと涙はなになかさまし

月も日もなぬかの夜の契をはきしほとにも又そわすれぬ

消し身に又もけぬべし春かすみかすめるかたを都と思へは

木にもおひす羽もならへす何しかも浪ち隔てゝ君を聞らん⁽⁸⁾

更衣の形見の品を見た桐壺帝が「亡き人の住処尋ねいでたりけむ、しるしの釵ならましかば」と思い、

尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

と歌い、「太液の芙蓉、未央の柳」と形容される「楊貴妃の容貌」を見るにつけ「花鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなき」更衣の姿にたまらず、

朝夕の言種に、翼をならべ、枝をかさはさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ、つきせすうらめしき。

と表現した時、もはや、『長恨歌』と『源氏物語』は全くの共鳴体となったと言うべきであろう。『長恨歌』の玄宗の嘆きの全容量が桐壺帝の嘆きの中に注ぎ込まれ、桐壺帝の嘆きを確立してしまった趣がある。絵を見ていた帝が絵の中の帝になった図であるとも言うべきか。

(11)

桐壺巻において、帝と更衣の愛の物語の占める割合は、ほど六割強である。さらに、今述べた駁負の命婦が蓬生の宿を訪し復命する記事は、全体の三割強。愛の物語の過半がここにすぎ込まれていることが分ろう。

記事に接近してみると、月が巧みに利用されていることに気付くはずである。

「夕月夜のをかしきほど」が命婦出発の時刻である。かしこは「月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる」とあるから、命婦と更衣の母との対話は、月光の中のそれと知れよう。「夜もふけ」「今宵過ぐさず、御返り奏せむ」と命婦が帰りを急いだ時は、「月は入りかたの空清う澄みわたれる」とある。

復命を聞く帝の胸の中を『長恨歌』で語った後、「月のおもしろきに、夜ふくるまで遊」ぶ弘徽殿の管絃を遠く配して、

月も入りぬ

とやる。この短文も、先の「御局は桐壺なり」と同様、小気味のよいもので、まるで月が腹を立てて西山に隠れ、弘徽殿の管絃を止めさせた観がある。その面白さはさておき、この短文に続く帝の歌、

雲のうへも涙にくるる秋の月いかですむらむ浅茅生の宿

でもって、月光の下、禁中と蓬生の宿とを両つながら浮び上らせ結ぶことになる。これがもし、月が落ちてから命婦が復命したと仮定すれば、蓬生宿と禁中の一体感はこちらに崩壊し、残るは断絶感のみということになる。小道具「月」の巧妙な演出と言うべきであろう。

さて、話が十分もって回ってしまったけれど、私は、この一体感と断絶感とでもって『源氏物語』と『長恨歌』との差を述べ、話を次に進めたく思う。

『長恨歌』は、「臨邛道士鴻都客」のところから神仙譚になってしまふ。「君王展轉思」が道士を求め方士を奔らせたのであるから、この展開は「君王」の楊貴妃を思う、その思いの深さの表現である。という点は理解出来るとし

でも所詮は荒唐無稽のそしりは逸れない。「海上」の「仙山」、「虚無缥缈」たる世界に楊貴妃が存在するといったところで、行けるのは方士ばかり、その方士とて、楊貴妃をつれては帰れない。

但教心似金鈿堅

天上人間會相見

は単なる気安めにすぎぬ。「天上」と「人間」は犯し難く断絶していて、もはや二人の「相見」は絶望である。

天長地久有時盡

此恨綿綿無盡期

は当然であろう。が、ここで天地の變滅の時を持ち出し、そうなくても「此恨」は不滅だと白居易が表現した瞬間、この絶望が絶対化し、玄宗と楊貴妃の、かつて間違いなく「人間」に存在した「比翼連理」の愛が、絶望の絶対化の対極に確立し、滅ぶことのない記録となる。白居易が神仙譚を持ち込んだ目的は斯辺にある。

『源氏物語』の方はどうなのか。

蓬生の宿は、同じ月の光の下にある。そこに更衣はもちろんいない。彼女はすでに愛宕で茶毘に付されて跡形もない。しかし、三歳の光源氏が眠っている。命婦の訪問の目的はこの光源氏に逢うこと、光源氏参内の要請であった点を見逃すべきではない。光源氏が蓬萊宮の楊貴妃なのであって、更衣はここではもはや亡き人であるにすぎない。

その光源氏が、「月日経て」蓬生宿を出、帝の側にやって来る。というのだから、『源氏物語』は『長恨歌』の世界を脱け出る物語と言わざるを得ない。

作者は、異様な愛を語るために『長恨歌』の力を借りた。特に、その終りを始めに描いて主人公登場のための母胎

とした。その異様な愛の世界から歩み出る形にしたところに、並々ならぬ作意があると考へたい。

(三)

結論から先に言えば、光源氏は、父と母との愛、もっと言えば『長恨歌』の愛を「人間」で成就するための存在である。父と母との「見果てぬ夢」を見る人生が光源氏の人生、つまり『源氏物語』なのだ。ということを作者は『長恨歌』を利用して手短かに宣言したのである。

桐壺帝の「長恨」はどうなるのかといへば、彼はその「長恨」を光源氏の上に徐々に転移させてゆき、愛の絶対者の位置をすべり降りてゆく。光源氏参内以後の展開を追ってみようか。

まず立坊。桐壺は光源氏立坊を「色にもいださせたまは」ない。もちろん、「一の御子」の頭越しに光源氏を、の氣持が無かったわけではない。が、「後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきこと」であつたから、というのが、色にも出さなかつた理由である。しかし、これは奇妙な論理である。と読者には映るだろう。読者は、いましがたまで「後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきこと」に熱中した帝とつき合わされてきたからである。

さばかりおぼしたれど、限りこそありけれ

と「世人」は噂し合つたと本文にはある。当然であろう。「限りこそありけれ」は巧い表現であると思う。絶対者桐壺が相対の世界へ始めて足を踏み入れた瞬間をうまくとらえている。以後桐壺帝は、相対性・日常性の住人となり、世人が「人の朝廷の例まで引きいで、ささめき嘆く」世界にたち戻ることはない。

さて、「かの御祖母北の方」は「慰むかたなくおほし沈みて、おはすらむ所にだに尋ね行かむ」と願ったかいあつてか、「つひに亡」くなる。光源氏六歳の時である。「慰むかたなくおほし沈」んだ理由を更衣の死にだけ限定するのはいかがなものか。私は、立坊の一件をからめて理解しなければ、副助詞「だに」を使った意味がないと思う。更衣が「おはすらむ所に」行くことは、彼女のせめてもの、最低限の願望にすぎぬ。

かくても、おのづから若宮など生ひいでたまはば、さるべきついでもありなむ。命長くこそ思ひ念ぜぬ

と、帝は復命した命婦に語った。この言葉は必ずや「御祖母北の方」の耳に届いているはずである。なぜなら、この綸言、命婦に対してではなく、「御祖母北の方」への帝の返答であったのだから。「さるべきついで」が何を意味するか、聡明な彼女には自明のことであつたに違いない。⁽⁴⁾が、綸言は汗の如き綸言でなくなり、二年間、痛憤の裡に彼女は死んだと了解すべきであろう。作者が、彼女のことを「母北の方」とここで書かず、「御祖母北の方」とわざわざ書いたのは、単なる気紛れとは思えない。彼女は光源氏の唯一の「後見すべき人」であつたのである。

この、さりげない事件もまた、帝の変質もたらした小さな波紋である。

『源氏物語』は以後トントンと運び、光源氏の超人的資性を語り、高麗人の予言をテコに光源氏の臣籍降下を述べる。今、高麗人の予言に着目したい。

国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。おほやけのかためとなりて、天下を輔くるかたにて見れば、またその相違ふべし

「国の親」は不気味な表現で、ほど「国母」の響きがあつて、事実、光源氏は帝の父となるのであるから、その予言ととれなくもない。が、ここで問題なのは、彼が「帝王の上なき位にのぼ」つたら「乱れ憂ふることやあらむ」と

いう点にある。

我々は、「帝王の上なき位にのぼった」人が「乱れ憂ふること」を引き起した、あるいは引き起しかつた事例を、今しがた経験したばかりではないか。

だから、帝が、光源氏の未来を天下大乱の帝位に求めず「おほやけのかためとなりて、天下を輔くるかた」に求めたのは、光源氏を自分にしない処置であったと考えられる。日常・相對の住人の「かしこき御心」である。

無品の親王の外戚の寄せなきにてはただよはさじ、わが御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなむ、行く先も頼もしげなる

この臣籍降下の妥当性は、倭相にも確認済みという周到さで、偏愛を捨て、「いよいよ道々の才をならはせ」自立の道を構ずる嚴父のイメージの人に帝はいつしかなっている。愛に猛進した昔日の面影はもはや無い。

しかし、これは物語の中の帝の論理であって、作者のそれは自ずと別のところにあるのではないか。桐壺巻の過半を費して帝位の恋の挫折を描きおおせた後、主人公を源氏物語世界に登場させたのである。彼に、父と母の見果てぬ夢を見させるというのであれば、作者が主人公の挫折の要因を除去してやるのは当然であろう。

高麗の相人の予言、および光源氏の臣籍降下の一件は、桐壺帝と更衣の事件でもって、その説得力を確保している点に注目したい。『源氏物語』はすでに内部の論理を持ち、内部の論理で動き始めているのである。『長恨歌』はセ
ルモーターにすぎぬ。

次に描かれる藤壺はどうか。

彼女は桐壺更衣をコピーしたような人物であるが、身分は断然違う。「先帝の四の宮」つまり歴とした皇女であり、しかも母は先帝の後である。「人の御きはまさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまは」ぬ人物である。だから、桐壺帝と藤壺との結婚は「人の許しきこえざりし」結婚ではなく、正々堂々たる理想の結婚である。日常性のレベルから見ても、これ以上の正統な結婚は望みえない。

桐壺帝の心は「おのづから」、思い出の更衣から現実の藤壺の方へ「うつろひて、こよなうおぼし慰」められてゆく。それを作者は、

あはれなるわざなり

と評した。湖月抄はこれを「浮世の有様」と言い、新潮古典集成は「人の心のさが」と注した。確かに、この帝の心の移ろいは、咲花抄の言うように「尤餘情あり哀なる」展開だといえよう。

が、ここは人情を活写するのが目的ではなく、帝が更衣の夢を追う人生を捨てた、否捨てさせられた事実を示す、と考えるべきだと私は思う。桐壺帝は異様な夢から完全に醒め、帝王の日常に帰還し倦むところがない。

こう書いておいて、作者は、光源氏の藤壺に対する幼い思慕の段を置く。藤壺を帝に紹介した典侍が、「母御息所も、影だにおぼえたまはぬ」光源氏に、「いとよう似たまへり」と言う。こういうのを悪魔のささやきというのであろうけれど、この典侍の言葉から、光源氏の藤壺への恋情が動き出す。彼の恋情は更衣、つまり母親願望と不離一体

である。典侍は、桐壺帝の中から更衣の夢を抜き出し、その更衣の夢を光源氏の中へ挿入したのである。

父の夢から子の夢への転換である。

典侍の設定は、そういう役目を負った軽んずべからざる設定であると私は思う。彼女は『長恨歌』の見果てぬ夢を光源氏に背負わせたのである。

そして、桐壺巻は終章をむかえる。光源氏十二歳、元服と結婚の記事でしめくくられる。光源氏は「引入れの大臣の皇女腹」で「ただひとりかしずきたまふ御女」と結婚させられる。彼女の「母宮」は「内裏のひとつ后腹」というのだから、桐壺帝とは同腹の兄妹ということになる。父が当代の権力者であったわけだから、この結婚、何不足ない理想の結婚である。だから、この結婚は、先の桐壺帝と藤壺のそれと同断である。この二つの結婚は、一見、関わりが無さそうだが、心理の底で微妙にからんでいると見るべきだ。

日常性の力が桐壺帝を組み敷き拉致しさせた例を我々はすでに見た。今また、その力が光源氏を襲う構図である。が、光源氏は、この日常性の襲撃を一応うけ入れながら、心理の裡で断固拒否する。左大臣の女は、「たぐひなしと思ひきこ」える「藤壺の御ありさま」によって相対化され、光源氏の思いは父のように「おのづから御心うつろひて、こよなうおぼし慰む」ことはない。慰むことのないばかりか、その思いは、この結婚によって増長加速されている点に注意しよう。

さようならむ人を見め

藤壺のような人と結婚したい。光源氏の胸の裡の藤壺は、「后腹」の藤壺ではない。「后腹」なら葵上でよかったのだ。光源氏の藤壺は非業の死をとげた「いとやんごとなき際にはあらぬ」母が棲んでいる藤壺である。

このことを、作者は巻軸でさらに明確にする。

内裏にはもとの淑景舎を御曹司にて、母御息所の御かたの人々、まかで散らずさぶらはせたまふ

桐壺更衣の世界は、こうして保存された。更衣のいた場所に今は光源氏が存在するのである。彼はここで母の夢を見ることになる。

里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨くだりて、二なう改め造らせたまふ。もとの木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしる。

源氏物語の蓬萊宮、蓬生宿も面目を一新した。二条院の完成である。

かかる所に、思ふやうならむ人をすゑて住まばや

と光源氏が嘆いた時、読者が胸に描けるのは、今のところ、桐壺更衣のような人、以外ない。実際、作者の意図はそれで十分であつたらう。

この光源氏の嘆息の後、

光源氏といふ名は、高麗人のめできこえて、つけたてまつりけるとぞ、言ひ伝へたとなむ。

と、蛇足めいた一文でもって桐壺巻を結んだところも、何やら意味ありげである。

最後に、もう一度、高麗相人の予言を読者に思い出させる。あれは、光源氏の未来の、表の予告であつた。裏の予告、つまりこれこそ物語の本筋だと思ふが、その予告は、作者自らが桐壺巻全体でもって表現している。すでに十分、その様態は見た。その集約された表現が、この光源氏の嘆息、「かかる所に、思ふやうならむ人をすゑて住まばや」である。だとすれば、巻軸で、作者は表と裏の予告を読者に二つながら与えて筆をおいた、と言うべきだろう。

次卷「帚木」以降は、光源氏の「思ふやうならむ人」を求める遍歴である。

その劈頭に置かれた雨夜品定め的女性談義で「中品」が強調されるのは、桐壺巻からの流れからみて不自然ではない。中品の定義を問う頭中将の疑義に、左頭頭はこう答える。

なりのほれども、もとよりさるべき筋ならぬは、世人の思へることも、さはいへどなほことなり。また、もとはやむごとなき筋なれど、世に経るたつき少なく、時世にうつろひて、おぼえ衰へぬれば、心は心としてこと足らず、わろびたることもいでくるわざなめれば、とりどりにことわりて、中の品にぞ置くべき。

これは、ほとんど桐壺更衣のことではないか。彼女の悲劇は「さるべき筋ならぬ」女が「なりのほ」った結果であったことは、藤壺との対比で作者が十分に語ったところだ。また、たとえ「もとはやむごとなき筋」であったとしても、父大納言はすでに亡く、母北の方のふんばりだけが頼りという状況は、後半にそのままあてはまらう。

帚木の雨夜品定めにおける、巻の過半を費した中品の特筆大書は、だから、桐壺のテーマつまり源氏物語の裏の予告の再現である。「思ふやうならむ人」を作者は、ここで読者に示しているわけである。

桐壺から帚木への非連続を説き、桐壺巻の孤立性を論ずる向きには、賛同しかねる。

私は、かつて桐壺更衣と空蟬の心理的連続を指摘したことがある。⁽⁷⁾ 当時は、二人の履歴に着目して一言したのみであった。今は、もっと強く言うべきであったと思う。

空蟬が更衣の面影を宿しつつも、その行為は正しく藤壺の陰画である事情については十分に論じたので、もう言う⁽⁸⁾

まい。

中品第二の女、夕顔は、もっと露骨に桐壺更衣のイメージを宿し、その行為も更衣その人といった趣がある。彼女に没頭する光源氏、彼女の死に自失する光源氏は、父帝そのままである。正反対の女空蟬の軌跡は、夕顔のそれを強調するためにあるのではあるまいか、とさえ思いたくなる。

夕顔の死後、重病二十余日間、死線をさまよった光源氏が回復した後、右近に語る。

はかなびたるこそは、らうたけれ。かしこく人になびかぬ、いと心づきなきわざなり。みづからはかばかしくすくよかならぬ心ならひに、女はただやはらかに、とりはづして人にあざむかれぬべきが、さすがにものづつみし、見む人の心に従はむなむ、あはれて、わが心のままにとり直して見むに、なつかしくおぼゆべき

「かしこく人になびかぬ、いと心づきなきわざなり」で、空蟬は飛んでしまい、「はかなびたる」夕顔の見果てぬ夢が光源氏をおおってしまう。この空蟬から夕顔への移行は、きわめて暗示的だ。

藤壺から若紫への移行。その予行がここにある。藤壺は、光源氏にとっては確かに夕顔なのだ。が、彼女自身にとっては断然空蟬なのである。彼女は、夕顔から空蟬へと逆行することによって光源氏との「こひぢ」から脱出する存在である。彼女が、いよいよ登場する若紫巻以降の彼女の生きざまは、この必死の脱出行、逆行にほかならない。

思慮分別の人、空蟬を夕顔より先に描いた意味は大きいといわねばならない。

最愛の人に死なれた場面から源氏物語は始まったわけであるが、夕顔巻で再び冒頭に立ちもどった感がある。「ただやはらか」で、「見む人の心に従はむ」女を、「わが心のままにとり直して見むに、なつかしくおぼゆべき」という光源氏の思念は、

かかる所に、思ふやうならむ人をすゑて住まばや

と同義ではないか。

帚木三帖は、桐壺のテーマを強調するための周到な仕掛けであると私は考える。

桐壺・帚木・空蟬・夕顔で源氏物語の序幕は終る。しかし、この序幕は、源氏物語のほとんど全てを語っている。桐壺巻を評して「序文までもいりたらず」と言う⁽⁶⁾。そんなことがあるものか。

最後に、明石上にふれておく。彼女の構想は、紫上の登場時に点描されているのだから、二つながら同時のものであることは動くまい。まず、紫上を慎重に恐る恐る源氏物語世界に定着させる。それから明石を、まき起した嵐の中から登場させる。彼女の一族は、桐壺更衣の縁者である。光源氏が須磨から明石に移ったのは、死んだ桐壺帝の命令である。謹慎中の光源氏が明石上との結婚を決意したのは、単なる好色心からではない。明石入道の身の上話を聞いたことが、あずかって力となったという展開が本文に示されている。入道の話の内容は明示されていない。願いがかなえられなければ海に入れ、という世間周知の話など問題とならぬ話を彼は語ったのではないか。はっきり言えば、大臣の子である彼が都を捨て明石に下ったなまましい実態を全て語ったに相違ない。そのなまましい話の中に、光源氏の外祖父で入道の伯父である按察大納言、そして桐壺更衣が登場したに違いない。

この話、決して愉快な話ではなかったであろうと思われる。大臣一族をおおった暗雲、悲劇仕立ての政治譚であったと考えたい。天下大乱はこれから起りそう、というのではなく、すでに起ってしまったのだ。そう考えると、桐壺巻は、一つの政治のうねりが終わった後の余波と読める。

余波は、もちろん桐壺更衣である。帝の熱愛は、その政治劇でふるえなかった彼の弱い意志の、無念の発露ではある

まいか。

死んだ桐壺帝の光源氏への指示は、そうすると、政治の波に沈んでいった者達、彼が生前救えなかった大臣一族救出へのサインだと読めるではないか。

私は今、宇多上皇・菅原道真・醍醐天皇のことを考えているのだが、もう紙数がつきた。稿を改めることにしよう。

桐壺巻は、巻を読み進めるにつれ、その重量を増してくる不思議な巻である。源氏物語のテーマを、一巻全体で明示しているからにはかならない。

注(1) 本文は全て新潮古典集成『源氏物語一』によった。

(2) 『長恨歌』の本文は、中国詩人選集13『白居易下』（昭和三十三年 岩波書店）によった。

(3) 本文は『群書類従・第十五輯』（続群書類従完成会）。

(4) 北村季吟は、この「さるべきついで」を注して、「若宮を春宮にもとおぼしめす御心なるべし」と言っている。

(5) 『湖月抄』は、有川武彦校訂・猪熊夏樹補註・三谷榮一増補『増註源氏物語湖月抄上』（名著普及会）を用いた。

(6) 『弄花抄』は、伊井春樹編『弄花抄』（源氏物語古注集成8 桜楓社）によった。

(7) 「帯木三帖仮象論」（文芸と批評2—9、3—1 日本文学研究資料叢書・源氏物語Ⅳ所収）

(8) 7)に同じ

(9) 『弄花抄』が「此巻（帯木）は序分にあたるへし一部に渡るへき心也桐壺の巻は其外也」と言い、宣長が「桐壺巻は、序分までもいりたらずといへる説、いはれたることなり」と左祖して以来、この説は根強く流布している。最近の大野晋著『源氏物語』（岩波書店）も、桐壺と帯木両巻間の断絶を力説している。